

# 信濃教育

## 巻頭言

### ザリガニ



信濃教育会が主催する「今を生きる子どもの絵展」において、令和二年度（第三十四回）永年保存作品となった内藤衣織さん（中込小学校一年）の作品である。「はさが大きいザリガニ」と題されたこの作品を、私は毎日見ていた。審査員の先生のコメントに「まるでこちらに向かってくるような迫力」とあるが、コメントもまた見事である。

私はこの絵を見ていていつも思うことがあった。それは、この子にはザリガニはどのように見えていたのだろうか、ということである。この絵は左右のはさが異様に大きく描かれているが、この子の目にはこのように見えていたのではないかと思うのである。小学校の廊下になんて立って立ったとき「あれ、こんなに狭かったかな」と感じたことはないだろうか。子どもの時は、この廊下はもつと広く、天井は高く、大人とは違う世界を見ていたのではないか。この子の見ている世界は、教師を含めた大人の見ているものと違うのではないだろうか。

そう考えると、「バランスを考えなさい」とか「もつとよく見て描きなさい」といった助言は、この子にどのような意味があるのだろうか、という問題意識が生まれてくる。絵の指導に限らず、往々にしてこのような助言をしてしまうことが私たちにはある。大人の見ているものを、子どもも同じように見ていると思ひ込んでいるからだ。

この問題意識は、子どもたちは何を、どのように見ているのだろうか、子どもたちはどのような音を聞き、何を感じているのだろうか、といったことを知りたいという強い衝動を生む。もつと子どもの世界を知りたいと、それなくして、どのような助言をするのか、どのような教材を用意するのか、どのような学習場面を作るのか、などなど指導の仕方が見えてこないからだ。

信州の教師たちが子どもに強い関心を寄せてきた理由がここにある。

（信濃教育会会長 武田 育夫）